

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：23703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02129

研究課題名(和文)1960～70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築

研究課題名(英文)Formation of Research Hub and Archiving Materials for Art Study in 1960s-70s

研究代表者

伊村 靖子 (Imura, Yasuko)

情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・講師

研究者番号：60647931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「精神生理学研究所」(1969-70年)の作家活動の研究、概念芸術に関するメディア論的研究に取り組んだ。「精神生理学研究所」は、複製論と観衆論がクロスする系譜としてアンドレ・マルローの「空想の美術館」を参照している。各地で同時多発的に行われる行為の記録を複写し、可視化する構想の背景には、杉浦康平が提案したビジュアライゼーション手法「時間地図」への関心があることがわかった。後に今野勉が「複写の思想」と称したように、個人による複写には複製を基盤とした情報構造への批評機能がある。情報構造に着目した表現の先触れとして「精神生理学研究所」を再評価した。

研究成果の概要(英文)：I engaged in research on "Seishin Seirigaku Kenkyujo" (1969-1970)'s activities as a part of media studies on conceptual art. "Seishin Seirigaku Kenkyujo" refers to Andre Malraux's Le Musee Imaginaire ou Les Voix du Silence as a genealogy combining the mechanical reproduction of art with audience theory. The group duplicated documents recording simultaneous performances held in various places within a framework for visualization inspired by Kohei Sugiura's "Time Distance Map." As Tsutomu Konno later noted by naming these activities "thought concerning copy," duplication by individuals serves the function of criticizing information structures based on facsimile. Through this research, I reevaluated "Seishin Seirigaku Kenkyujo" as a portent of creative expression focused on information structures.

研究分野：芸術学

キーワード：1960-70年代 現代美術 概念芸術 アーカイブ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1960～70年代日本の美術資料を文化資源として捉え、調査研究を行うことにより、美術史と周辺領域との接点を検証し、戦後日本の芸術表現史の枠組みそのものを問い直すことを目的とするものである。その背景として、60～70年代の芸術表現は、美術、デザイン、音楽、映画、テレビ、アニメーション等の領域横断的な試みと、イベントやパフォーマンス、インスタレーション等の多様な活動によって特徴づけられる。これらの表現は一過性の形式であり、オリジナル作品が現存しないことが多く、したがって記録としての資料の調査が研究上重要な意味を持つ。特に70年代には自主的なメディアを活用した表現活動がさらに活発化していくことから、資料は単なる「記録」以上の意味を持つと考えられる。とりわけ、概念芸術の展開において、雑誌、写真、フィルム、テレビ等のメディアが果たした通信媒体としての役割とは何であったのか、そして、複製による表現の特質について議論したいと考えた。

本研究のもう一つの特徴は、従来の所蔵作品管理・図書管理等の枠組みに依拠しない美術資料の体系的な収集・保存へ向けたケーススタディとしての位置づけにある。国立新美術館において、「精神生理学研究所」関連資料の受入れから目録作成へ向けてのディスカッション、概念芸術のコンテキストの再配置を通じて、美術史の基礎研究のみならず同時代の社会・文化との接点を明示することを目指した。

2. 研究の目的

具体的には、主に概念芸術(コンセプチュアル・アート)のメディア論的分析として、(1)「精神生理学研究所」(1969-70年)の作家活動の検証(資料目録の作成)、(2)1960～70年代の概念芸術の展開において雑誌、写真、フィルム、テレビ等のメディアが果たした役割の検証、(3)現代芸術における資料研究、アーカイブの位置づけについて考察した。

3. 研究の方法

研究課題として、関係機関の研究者と連携を図りながら、次の3点に取り組んだ。

1. 「精神生理学研究所」(1969～70年)の作家活動の研究分析
2. 概念芸術に関するメディア論的研究分析
3. 現代芸術における資料研究の手法についての研究分析

[2015年度]

研究代表者は、研究分担者の鈴木勝雄と共に、2015年4月に国立新美術館で稲憲一郎氏より「精神生理学研究所」関連資料の寄贈を受けた。同資料には、松澤宥、水上旬らによる概念芸術関連資料も含まれている。8月、9

月に資料のデジタル化を行うと同時に、アーカイブ化のための予備調査を中心に行った。これにより、概念芸術と呼ばれる動向に関わった作家、関係者に関する基礎資料の収集を行い、分類、編纂方法について調査・検討を進めることができた。

また、研究代表者は、60年代美術資料の公開・活用へ向けて国際シンポジウム「メディアと芸術のあいだ ヤシャ・ライハートの60年代の「展覧会」を読み解く」を開催(国立新美術館・東京芸術大学、2015年10月23・25日)。概念芸術の背景にあったと考えられる領域横断的な活動について、「1960年代日本美術における「デザイン」の意義について「色彩と空間」展(1966年)がもたらした議論を中心に」(『NACT Review 国立新美術館研究紀要』第2号、24-35頁)を執筆した。これらの機会を通じて周辺領域との接点を探り、研究範囲の射程や共同研究の方法について確認することができた。

[2016年度]

2017年2月17日に国立新美術館にて、アーカイブズ学研究における定義と理念について知見を得ることを目的に、研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」を行った。アーキビストとして、平野泉(立教大学共生社会研究センターアーキビスト)、齋藤歩(京都大学総合博物館研究資源アーカイブ特定助教)から、それぞれ社会運動系のミニコミと、60～70年代の芸術運動の接点、メールアートのアーカイブズの事例について発表および助言を求めるとともに、谷口英理(国立新美術館美術資料室長)、渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター教授)からは、それぞれアーカイブズ機関としての立場と、コンセプチュアル・アート研究における資料研究の重要性についてコメントを得た。オブザーバーとして、栗田大輔(美術批評)、坂口英伸(国立新美術館アソシエイトフェロー)、藤本貴子(国立近現代建築資料館研究補佐員)、馬定延(多摩美術大学 JSPS 外国人特別研究員)、宮田有香(国立国際美術館研究補佐員)の各氏から、実践や各研究分野に基づいたコメントを得た。

これらを通じて見えてきたのは、目録のもつ機能、すなわち、情報化のための手段でありながらもそこに発動する意味についてであり、表現としての重要性であった。その一例として、同日に松井茂より、60～70年代のコンセプチュアル・アートの活動を経て90年代後半にどのような印刷物による表現を展開したかについて発表が行われた。河原の所属ギャラリーである David Zwirner が作成している活動歴の記述方法や書籍の台割から、河原にとってこのシリーズがどのような意義を持っていたのかを考察する試論として、注目される。

[2017年度]

2017年には、7月26日、8月22日、9月26日に情報科学芸術大学院大学にて定例会を開催することにより、それぞれの課題に関する議論を深めた。1回目は、研究代表・分担者による発表およびディスカッション、2回目は、原久子(大阪電気通信大学教授)をオブザーバーとし、川崎弘二(電子音楽研究)と伊村、3回目は、成相肇と鈴木勝雄がそれぞれ発表を行った。川崎は、1960~70年代の日本の前衛音楽と題し、小杉武久の活動を中心に発表した(参考:「小杉武久 音楽のピクニック」(芦屋市立美術博物館、2017年12月9日~2018年2月12日))。音楽作品を例に、作曲の他、コンサートホールやイベントにおける演奏、ラジオ放送やテレビ番組における演奏、パッケージメディアでの発表を含め、研究対象としての資料の位置づけを知ることができた。成相、鈴木の研究発表は『情報科学芸術大学院大学紀要』第9巻の論考へと反映されている。

4. 研究成果

「精神生理学研究所」(1969~70年)研究と各論考の位置づけ

「精神生理学研究所」とは、1969年から70年にかけて、稲憲一郎、竹田潔、島村清治の呼びかけによって行われた表現活動である。この活動は、当時、東京造形芸術大学の学生であった稲憲、竹田、島村によるもので、各表現者が存在する場所を研究所とみなし、東京研究所(稲憲一郎)を拠点に、新潟研究所、茨城研究所、群馬研究所、モロッコ研究所、長野研究所等の各拠点の作家、16拠点の参加者に呼びかけ、以下の手順を経る。

- (1) 各拠点より、決められた日時(あるいは無行為)に関する「データ」(手稿、印刷物、写真、オブジェ等の原資料)を東京研究所宛に郵送。
- (2) 東京研究所でゼロックス等の複製技術によって「データ」を紙に複写。
- (3) 2の複写物をトレーシングペーパーの帯で研究所ごとに束ね、「精神生理学研究所」という活字風のレタリングをほどこしたトレーシングペーパー製封筒におさめる。これを「原本」と呼ぶ。
- (4) 再び各拠点へ郵送。

この活動は、1969年12月7日15時00分の「第1回精神生理学研究所」を皮切りに、1970年1月4日12時00分、2月8日12時00分、3月8日12時00分、4月12日12時00分、5月10日12時00分までの6回(第一次)および5月10日12時00分以降を含め全7回にわたり続けられた。これらの一連の活動を、彼ら自身が「不可視的美術館」と形容したことからは、アンドレ・マルローの「空想的美術館」からの着想が窺える。「精

神生理学研究所」は、同時代の美術制度への投げかけとともに、美術とインフラ、美術と都市との関係を浮かび上がらせる記録でもある点が独創的である。

「精神生理学研究所」を同時代の芸術の文脈に置き換えるならば、メール・アートとしての側面、ゼロックス等の複製技術により独自の表現媒体を構想・実現した点に注目できる。当時日本で普及し始めたゼロックスや青焼きで手稿、印刷物、写真、オブジェ等を複写するというプロセスにおいて、あらゆるものの質感や意味を複写後のテクスチャーに還元した状態を、作品とみなした点に特徴がある。ゼロックスによる芸術表現の系譜については、成相肇が『情報科学芸術大学院大学紀要』第9巻に論考を寄稿している。

加えて、表現形式自体の提案である点や、各地で同時多発的に行われることを可視化する試みという点では、情報デザインにも通じる要素がある。これらの点に焦点をあてた拙稿として、「「精神生理学研究所」—メディア論としての作家表現」『NACT Review 国立新美術館研究紀要』第4号(2017年12月)108~119頁がある。

さらに、郵便制度を利用し自主的なメディアを活用した新たなネットワークの構築とみなす時、「精神生理学研究所」を同時代のコミュニケーション運動をはじめとする共同体の議論の中に位置づけることができる。70年前後を、政治の季節の転換期と捉え、カウンター・カルチャーの動向と関連づけた言説研究として、鈴木勝雄が『情報科学芸術大学院大学紀要』第9巻に論考を寄稿している。

「精神生理学研究所」関連資料の内訳

同資料は、2015年4月に稲憲一郎より、国立新美術館に寄贈された。その内訳は以下の通りである。寄贈時の原秩序を尊重し、資料相互の関連性をできる限り損なわないように所蔵することにより、「精神生理学研究所」の活動および稲個人の活動、人的なネットワークが見える状態を心がけた。あわせて、鈴木勝雄とともに稲に対して行ったインタビュー「美術資料をめぐる回想 稲憲一郎氏に聞く—「精神生理学研究所」(1969~1970年)を中心として」および資料目録を、『NACT Review 国立新美術館研究紀要』第4号(2017年12月)318~332頁に掲載した。

これらを通じて、本研究の課題である現代芸術における資料研究の手法として、研究論文、資料目録、オーラル・ヒストリーを連動させて公開することの重要性を確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

伊村靖子、1960-70年代に見られる芸術表現

の研究拠点形成と資料アーカイブの構築、情報科学芸術大学院大学紀要、第9巻、2018年、pp.142-148

鈴木勝雄、「精神生理学研究所」というオルタナティブ・スペース、情報科学芸術大学院大学紀要、第9巻、2018年、pp.212-224

伊村靖子、「精神生理学研究所」—メディア論としての作家表現、NACT Review 国立新美術館研究紀要、第4号、2017年、pp.108-119

伊村靖子、鈴木勝雄、松井茂、美術資料をめぐる回想 稲憲一郎氏に聞く—「精神生理学研究所」(1969~1970年)を中心として、NACT Review 国立新美術館研究紀要、第4号、2017年、pp.318-332

伊村靖子、馬定延、国際シンポジウム「メディアと芸術のあいだ—ヤシャ・ライハートの60年代の「展覧会」を読み解く」、NACT Review 国立新美術館研究紀要、第3号、2016年、pp.340-351

谷口英理、伊村靖子、馬定延、長名大地、美術資料をめぐる回想 杉浦康平氏に聞く—1960年代の東京画廊のカタログデザインを中心として、NACT Review 国立新美術館研究紀要、第3号、2016年、pp.408-439

松井茂、戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学 高松次郎の場合、情報科学芸術大学院大学紀要、第8号、2017年、pp.102-111

伊村靖子、1960年代日本美術におけるデザインの意義について—色彩と空間展がもたらした議論を中心に、NACT Review 国立新美術館研究紀要、査読有、第2号、2016年、pp.24-35

鈴木勝雄、1970年代の分水嶺—日本における概念的な芸術の系譜(2)、東京国立近代美術館研究紀要、査読有、第20号、2015年、pp.6-21

松井茂、「かいわい」に「まれびと」が出現するまで—「お祭り広場」1970年、at プラス、第25号、2015年、pp.112-124

〔学会発表〕(計11件)

伊村靖子、1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築、京都市立芸術大学芸術資源研究センター第19回アーカイブ研究会「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」(招待講演) 2017年12月9日、元・崇仁小学校

鈴木勝雄、「精神生理学研究所」というオルタナティブ・スペース、第3回研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年9月26日、

東京国立近代美術館

伊村靖子、「精神生理学研究所」—メディア論としての作家表現、第2回研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年8月22日、情報科学芸術大学院大学

伊村靖子、「空想の美術館」の受容史と精神生理学研究所、第1回研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年7月26日、情報科学芸術大学院大学

鈴木勝雄、60年代のアナキズムの復権と文化革命、第1回研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」2017年7月26日、情報科学芸術大学院大学

松井茂、日本におけるコンクリートポエトリーの受容、第1回研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」2017年7月26日、情報科学芸術大学院大学

伊村靖子、「精神生理学研究所」資料研究とアーカイブ化の論点、研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年2月17日、国立新美術館

鈴木勝雄、日本における「概念芸術」の射程、研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年2月17日、国立新美術館

鈴木勝雄、歴史への想像力と美術館、国立新美術館開館10周年記念ウィーク、シンポジウム2:「『アーカイヴ』再考—現代美術と美術館の新たな動向」(招待講演) 2017年1月28日、国立新美術館

松井茂、「PURE CONSCIOUSNESS: EXHIBITIONS & PUBLICATIONS」をめぐって、研究会「1960-70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築」、2017年2月17日、国立新美術館

松井茂、IAMAS メディア表現アーカイブ・プロジェクトについて、文化庁平成27年度メディア芸術連携促進事業タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復/保存に関するモデル事業、京都市立芸術大学芸術資源研究センターワークショップ(招待講演) 2016年2月14日、元・崇仁小学校

〔図書〕(計1件)

Katsuo Suzuki, " 'Agitate' the Tokyo Olympics!: The Intervention Art of Hi-Red

Center ”, The Emergence of The Contemporary: Avant-Garde Art in Japan, 1950-1970, exh.cat., The Japan Foundation, pp.83-94

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
京都市立芸術大学芸術資源研究センター第
19回アーカイブ研究会「井上隆雄写真資料に
基づいたアーカイブの実践研究」(招待講演)
<http://www.kcua.ac.jp/wp-content/uploads/247ad3768c08565b499bcdbab6bf13d2.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊村靖子 (IMURA Yasuko)
情報科学芸術大学院大学・メディア表現研
究科・講師
研究者番号：60647931

(2) 研究分担者

鈴木勝雄 (SUZUKI Katsuo)
独立行政法人国立美術館東京国立近代美
術館
研究者番号：30321558

松井茂 (MATSUI Shigeru)
情報科学芸術大学院大学・メディア表現研
究科・准教授
研究者番号：80537077